

no.4

めぐりあえたこの暮らし

特集の最後は、本人の住まい・暮らしの紹介です。紆余曲折を経て、自分の理想の生活を獲得した3名の方について、支援者の方から紹介してもらいました。どの方も、それぞれの局面において「出会い」により暮らしが変わったことがわかります。

「普通のおばあちゃんになりたい」「ゴッホのひまわりを見たい」「夫婦で旅行に行きたい」、それぞれの夢がかなうことを願います。

① 夢は、奥さんと旅行に行くこと



森 英二 (青森県・青森市 奥さんとグループホームで生活)

奥崎萌美 (青森県・拓心館 生活支援員)



森さんは、1960(昭和35)年1月5日、現・青森市浪岡高屋敷に森家の長男として誕生しました。勉強が少々苦手なところや友だちとうまく生活することができず、小学校1～4年生は杉沢小学校の特別支援学級に通っていましたが、学校が家から遠かったこともあり、小学校5年生の時に児童入所施設「もみじ学園」に入所しました。

「もみじ学園」卒園後は青森市にあるガラス工房に就職しました。働いている最中にてんかん発作があり、継続受診が必要な状況で、かつ人員整理があり、ガラス工房を退職しました。その後、農園のお手伝いの仕事を経て、現在「青南商事」に勤めています。

一方、生活面に関しては「もみじ学園」卒園後は自宅に戻って就職先に通うも、母との折り合いが悪く、1987(昭和62)年4月に通勤寮「拓心館」へ入ることとなりました。拓心館では洗濯・掃除など、生活に必要なことを学びながら過ごしました。2年間の在籍を経て、グループホームでの生活がスタート

します。最初は4～6人が一つの家で生活するタイプのグループホームで生活していましたが、もう少し自立を目指した生活をと思い、アパートタイプのグループホームに移行しました。

2004(平成16)年に移行したグループホームで、一目惚れした女性がおおり、その方が妻の万里さんです。会社の行き帰りが一緒だったり、万里さんが少々忘れっぽい性格であったため、次第に「万里さんを支えていきたい」「万里さんと一緒に生活していきたい」という気持ちが大きくなったようです。初めは様々な不安があり、支援員に相談しても断られると思っていたようですが、私たち職員や互いの両親も結婚を認めました。様々な人の協力を得て、2007(平成19)年10月14日に結婚式を挙げ、晴れて夫婦となりました。

当時の支援員は、「小さい頃から“家族”というものに恵まれない二人だったが、夫婦になったことで自分たちで“温かい家庭”を築いていくことができているのではないか、当時の判断は間違っていない



旅行を楽しむ森さんご夫婦

た」と話していました。これぞ意思決定支援に基づく、本人らしさを尊重した生活支援なのではないか

と思いました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で思うような生活ができていませんが、旅行や外出を趣味とする森さんご夫婦は現在の状況が落ち着いたら、「花巻温泉に旅行に行きたい」と話しています。英二さんはてんかんの他にも、最近大きな心臓病が見つかりましたが、定年を迎えた今も働きに行っています。その理由と一緒に通勤する妻を見守るため、旅行や外出のための資金を貯めるためです。妻思いの英二さんと万里さんの希望がかなうように、新型コロナウイルスが早く終息することを願うと共に、本人たちのこれからの生活をより良いものにしていくために質の良い支援をしていきたいと思います。

② 私が選んだ私の暮らし

～グループホームを拠点にした地域での暮らし～



関口貴子 (埼玉県・のぞみホーム)

酒井依子 (埼玉県・鴻沼福祉会 つばさ共同作業所 施設長)



関口貴子さん(68歳)が暮らすのぞみホームを久しぶりに訪れたのは、12月24日。キッチンではチキンのいい香りが漂い、手作りのケーキも準備されていました。「サラダは、私がつくったんだよ」と穏やかな表情で私に教えてくれました。

関口貴子さんは、さいたま市中央区(旧与野市)で生まれ、68年間この地で育ち、暮らしてきました。実家は手広く事業をしており、父は市議会議員もしていました。大事に育てられた貴子さんでしたが、1988(昭和63)年、39歳の時、社会福祉法人鴻沼福祉会が開設した第2たかさご荘に入居します。「親が亡くなっても大丈夫なように、自分でご飯を作れるようになりたかった。家では“邪魔”って言われて、

やらせてもらえなかった」そうです。当時、グループホーム制度はなく、第2たかさご荘は法人の自主事業でした。「峯さん(専任職員)にさばの味噌煮の作り方を教えてもらったの」「ご飯も味噌汁も一人で作れるようになったよ」と、30年以上も前のことを鮮やかに覚えていました。

1990(平成2)年、第3たかさご荘に移ります。第3たかさご荘は、各居室に自炊設備がついていました。第2たかさご荘で覚えた家事の力を発揮し、自分でメニューを考え、料理のレパートリーも広がりました。家財道具も増え、第3たかさご荘が「自分の家」になっていきました。第3たかさご荘での暮らしが20年以上続き、60歳を過ぎた頃から、身体